



広島大学

日本鶏資源開発プロジェクト研究センター

開設記念公開シンポジウム



鶏王国日本の今を考える

— 人間活動と環境保全との調和を目指して —

2010年 8月19日(木) 13:00~

広島大学東広島キャンパス

生物生産学部 2階 C206 講義室

講演

事前申込不要

参加無料

“生ける文化財 —日本在来家畜・家禽の現状と将来—”

小宮 輝之 (東京都恩賜上野動物園・園長)

“鶏王国 土佐 —土佐ジロー・はちきん地鶏の開発—”

長坂 直比路 (高知県畜産試験場・中小家畜課長)

“日本鶏, その多様性が地球を救う”

都築 政起 (JABプロジェクト研究センター長)

コーディネーター 吉村 幸則 (大学院生物圏科学研究科・副研究科長)



最寄駅●JR西条駅、JR東広島駅 (いずれの路線も駅から広島大学行バス)

問い合わせ先●〒739-8528 東広島市鏡山1-4-4 広島大学大学院生物圏科学研究科家畜育種遺伝学研究室
TEL & FAX. 082-424-7950 E-mail: tsudzuki@hiroshima-u.ac.jp http://home.hiroshima-u.ac.jp/jabprc/

広島大学日本鶏資源開発(JAB)プロジェクト研究センター
広島大学大学院生物圏科学研究科



広島大学日本鶏資源開発プロジェクト研究センター

Hiroshima University **JAPANESE AVIAN BIORESOURCE** Project Research Center



研究科長挨拶

江坂 宗春（広島大学 大学院生物圏科学研究科長）

当研究科では、これまで、鶏を中心とした家禽の研究を先進的に進めておりましたが、この度、より多角的かつ大規模に家禽関連分野の研究を推進すべく、都築教授をセンター長として、「日本鶏資源開発プロジェクト研究センター」が組織されました。本センターは、そのセンター名に「日本鶏」を冠しておりますが、日本鶏のみの研究に固執するわけではなく、外国鶏、ウズラ類ならびにその他の鳥類についても研究を行うものであります。

本センターでは、現在、日本鶏を主体に40品種(内種、系統まで含めると80種類；総羽数1,500)のニワトリを保有しております。さらにウズラ類(4種)に付きまして、突然変異系統を中心に28系統(総羽数1,500)を保有しております。この保有する家禽資源の種類豊富さは他に類例をみないものと思われま。持続可能な食料生産に向けて、生物生産学の重要

度が高まるなか、本センターの企図する「日本鶏を中心とした家禽の遺伝資源保護～増殖～探求～利用」は、広島大学が世界に向けて発信できる特色ある研究です。また、本センターの研究活動は、日本が直面している潜在的食料危機への対応のみならず、基礎生物学から医薬学分野への応用にも貢献する実用性の高いものであります。

この度、「日本鶏資源開発プロジェクト研究センター」の開設を記念し、生物圏科学研究科も共催して「鶏王国日本の今を考える」と題した公開シンポジウムを開催します。まずは、本シンポジウムを成功させ、それを弾みに、本プロジェクト研究センターが、ますます発展・充実していき、世界をリードする先端的な研究拠点にならんことを期待します。

生ける文化財 -日本在来家畜・家禽の現状と将来-

小宮 輝之（東京都恩賜上野動物園・園長）

世界各地でその地に育まれた家畜や家禽が飼われています。日本にも日本の風土の中で日本人の生活を支えてきた在来家畜・家禽がいます。

小型の日本在来家畜は、千年以上にわたり利用されてきた持続性の高い資源でした。しかし、明治維新後に西洋品種との交配で日本の家畜は大きくなり、昔からの小さな在来品種はほとんど姿を消しました。

日本人が創り出した動物で世界的に通用するものに錦鯉とともに日本鶏があります。食べたり働かせたりする目的ではなく、楽しむために育種し改良して創られた日本鶏は生ける文化財として誇るべき存在です。

上野動物園の子ども動物園は1948年の開園以来、動物とのふれあいを通じて、命を実感する場でした。現在は少なくなった日本在来の家畜や家禽を集め、命の教育に加え、新しい役割として日本人の創った生ける文化財の展示、そして日本の遺伝資源の保存をおこなっています。



鶏王国 土佐 -土佐ジロー・はちきん地鶏の開発-

長坂 直比路（高知県畜産試験場・中小家畜課長）

日本鶏の主たる品種34種の中で、高知県には尾長鶏(オナガドリ)、土佐地鶏(トサジドリ)、東天紅(トウテンコウ)、葦曳矮鶏(ミノヒキチャボ)、鶉矮鶏(ウズラチャボ)、大軍鶏(オオシャモ)、小軍鶏(コシャモ)、宮地鶏(ミヤチドリ)、土佐九斤(トサクキン)の9品種が存在する。はじめの7品種は娯楽用鶏であり、あとの2品種は実用鶏である。これらの品種を作出あるいは飼育保存する、高知県(高知県人)の鶏に対する熱い「思い」は日本全国的にみても世界的にみても特筆すべき事柄である。

1980年代以降、過去に作出された上記品種を利用して、「高知県の特産実用鶏(JAS地鶏)」の作出が試みられ、これまでに2つが世に出ている。その名は、「土佐ジロー」(卵肉兼用鶏)と「はちきん地鶏」(肉専用鶏)である。前者の作出には、卵・肉ともに美味で古くから高知県で最も愛されている土佐地鶏が素材鶏として用いられている。一方、後者の作出には、肉質が極めて優れている土佐九斤および大軍鶏が素材鶏として用いられている。

本講演では、高知県で古くから愛育されている品種の特徴を述べるとともに、「土佐ジロー」および「はちきん地鶏」の特徴、さらにはこれらの開発苦労話を紹介する。



日本鶏、その多様性が地球を救う

都築 政起（JABプロジェクト研究センター長）

日本には、日本で作出されたニワトリ品種(日本鶏：にほんけい)が約40品種存在する。これらの品種のほとんどが観賞用の品種であり、その特徴、性質など(形質)は極めて多様性に富んでいる。形質が多様であるということは、それらを支配している遺伝子も多様であることを意味する。日本鶏のほとんどの品種が本来観賞用であるものの、その中には、医学・生物学分野における研究材料として有望であると考えられるものが多数存在する。

また、これに加え、日本の鶏卵・鶏肉の自給率向上に役立つ遺伝子をもつと考えられる品種も存在する。さらに、今後、懸念されている地球温暖化が起こっても、温暖条件下でも高い生産性を発揮する遺伝子をもつ品種も存在しそうである。これらの遺伝子を発見してその情報を活用し、斬新なDNA育種によって優良実用鶏を創出すれば、将来の我が国の食料安全保障に貢献することができる。また、そのニワトリあるいは開発技術の世界展開を行えば、地球レベルでの動物タンパク資源の確保に貢献できる。

本講演では、時間の許す限り、日本鶏がもつ多様性とその有用性について紹介する。

